

ウトが今のところ読みやすいのではないかと思います。ポスターのオンライン発表がいつまで続くかわかりませんが、この経験はオフラインのポスター作成にも活かしていけると思います。

2020年以後、オフラインでの学会参加がなくなっておりません。毎年3月は学会参加のために各地に赴いて、おいしいお酒を飲むことができました。オンラインでは自分で用意したお酒しか飲めないのが残念ですが、多くの方が参加し議論・

交流が行える懇親会のような場が学会には重要であるように思います。今大会は学生という身分で参加する最後の学会となりましたが、コロナ禍という状況にあって円滑な大会運営に尽力された委員会の皆様に感謝申し上げます。私は学位取得後、アオミドロ類以外の接合藻類の系統分類学的研究やアオミドロ類を用いた進化生物学的研究を行っていきたくと考えています。成果は藻類学会で報告していきますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



「フラスモ」は江戸時代から「フラスモ」だった

山ノ内 崇志・加藤 将

山ノ内・加藤 (2022. 藻類 69: 71-78) は田中芳男による明治初期の稿本を検討し、フラスコモ *Nitella* の和名は吉田雀巢庵が西洋壘 (フラソコ) の色彩にちなんで名付けた説があること、稿本中の表記は「フラスモ」であったことを報告した。牧野富太郎は「(江戸末期に) ふらすこもト記セル證左」があり明治初年に「フラスモ」に変えられたのだと主張し (牧野 1910. 植物学雑誌 24: 343-344; 牧野 1916. 植物研究雑誌 1: 35; 牧野 1929. 植物研究雑誌 6: 369-402), これが受け入れられ現在は「フラスコモ」の表記が定着している。しかし、牧野はその「證左」を明記しておらず、情報源の検証はなされていない。

牧野の主張が正しければ、江戸時代には「フラスコモ」の表記が一般的であったと考えられる。ところが、著者らは江戸時代後期の史料『尾張名古屋博物會目録』(国立国会図書館蔵) の第貳冊に「フラスモ」の表記を確認した。本史料は尾張の学者らによって定期開催されていた博物展示会の出品目録であり、天保13年(1842年)開催時の出品物に「フラスモ 會主」の記述が見られる (図1: <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2558465/83>, 2022年4月28日最終確認)。天保8年から安政6年までこの博物展示会は吉田雀巢庵の自宅で開催されていたため (磯野・田中 2010. 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学 47: 15-39), ここでいう「會主」は吉田を指すと思われる。なお、同博物展示会の他の目録である『本草會物品目録』(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536148>, 2022年4月28日) および『博物會目録』(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607325>, 2022年4月28日), また、広く物品の和名を挙げた吉田雀巢庵の著作『物殊品名』の写本 (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2595910> および <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606393>, いずれも国立国会図書館蔵, 2022年4月28日最終確認) を精査したが、上記以外にはフラスモまたはフラスコモの名は見出せなかった。

吉田が和名を名付けたとの説に従えば (山ノ内・加藤 2021), 本史料は当初から「フラスモ」と表記されていた可能性を支持する有力な証拠だと言える。ただし、今回確認されたのは1例だけで誤字・脱字や表記ゆれの可能性も残るため、将来的に牧野 (1916, 1929) が示唆した典拠が特定されることを期待したい。なお、仲田 (2022. 藻類 70: 123) は現行の「フラスコモ」を「フラスモ」に改めることには否定的であるが、著者らも同意見である。

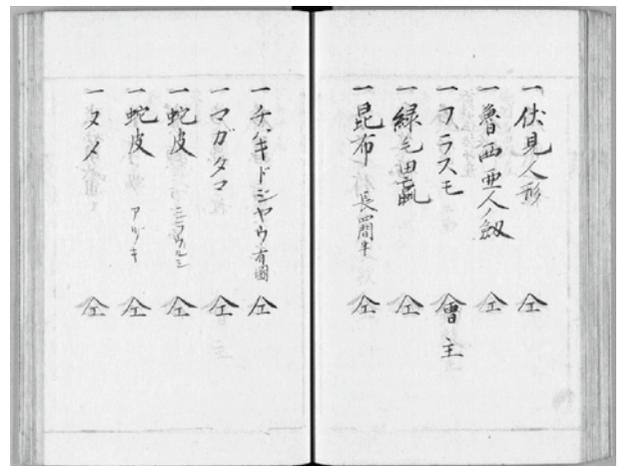


図1. 『尾張名古屋博物會目録 第貳冊』の天保13年(1842年)開催分部。右から3行目に「フラスモ」の品名が見られる。国立国会図書館デジタルコレクションより取得、一部改変。著作権保護期間満了。